

ヘブル書の構造について

川 村 輝 典

I

Spicq はそのヘブル書註解の中で⁽¹⁾、ヘブル書の基本となる概念を見出すことは容易であるにもかかわらず、これとこれに結びつくさまざまな主題との互いの緊密な関係を認識することは困難であることを指摘している。その理由として彼は七項目をあげているが、その中の第五番目の指摘はわれわれにとってきわめて示唆に富んでいると思われる。すなわち、本書においては教理と勧告とがあたかも鱗のごとく互いにつままっているので全体の脈絡がつかみにくい。一体勧告がある一つの主題の結論となっているのか、それとも新しい主題の導入部をなしているのか、⁽²⁾というのである。

このスピックの指摘によっても明らかのように、ヘブル書は新約聖書の中でも特に入念に構成された文書という印象を人に与える。それだけに本書の構造を明らかにせんとする試みが絶えず行なわれて来たし、最近の註解書にはこの問題が緒論の重要な一項目としてとり上げられている。⁽³⁾われわれはまず問題の方向を明らかにするために、研究史的瞥見を行ないたい。

II

中世紀における本書の構造についての研究の状況は、13世紀頃から述べるのが適切であろう。13世紀は神学の体系化の時代であったため、註解者たちはヘブル書を区分する場合、その教理に基づいてこれを行なった。たとえば中世の最大の神学者といわれる Thomas von Aquinas は本書の中心をキリスト論においている。《Intendit autem ostendere excellentiam novi ad vetus Testamentum per excellentiam Christi, quantum ad tres personas solemnes in ipso veteri Testamento contentas, scilicet angelos, per quos lex tradita est... Quantum ad Moysen, a quo vel per quem data est... Quantum ad sacerdotium per quod ministrabatur... Unde primo *praefert Chris-*

御子における神の啓示とその古い契約に対する優越性(1:1—4:13)

真の大祭司イエス (4:14—10:18)

信仰の忠実への勧告 (10:19—13章)

⁽⁹⁾中川氏の区分もこれと同種のもと考えられる。すなわち、序論 (1—6章)、本論 (7—10:18)、勧めと結び (10:19—13:25) という区分である。

ヘブル書の区分をギリシャの勧告文 (Mahnreden) に擬えて行なっているのが、⁽¹⁰⁾Haering と ⁽¹¹⁾Windisch である。これによると

序論 (1:1—4:13)

大祭司イエスについての二つの叙述 (4:14—6:20 および 7:1—10:18)

結語 (10:19—13:25)

となり、結果的には他の三分法と違わない。ただその規準に特徴があるに過ぎない。ヘリングが用いた方法というのは次のようなものである。《…われわれはくりかえして出会う沈潜において、個々の思想をまず単に事実のまま思い浮かべ、次にそれをその頻度と重要性にしたがって区別せんと試み、かくして主要思想、すなわち多くの思想の内的統一を発見し、著者の精神において意図された関連について考察するであろう⁽¹²⁾》。つまり彼は所与の概念に基礎をおくという概念的規準にしたがっているのである。

Synge の提示した方法は上の二つの方法と全く異なったものである。彼はヘブル書が見出し語 (Stichwort) による連合によって互いに作用し合っている、三つの本来独立した文学的統一を再建する⁽¹³⁾。

1. 宣言 (1:1—14, 2:5—18, 3:1—6, 4:14—5:10, 6:13—10:25) (本来はユダヤ人に宛てられたもので、70年以前に書かれた)
2. 勧告 (2:1—4, 3:7—4:13, 5:11—6:12, 10:26—31, 12:18 ff.) (同様にユダヤ人に宛てられているが、同時に決定的ではないがキリスト教会に結びついており、およそ紀元前55年に書かれた)
3. 10:32 から 12:17 までもおそらくまた統一体であって、第2と同様の相手に宛てたものであろう。

だがこのシンジの方法も、上の二つと同様に今日ではすでに古風なものと言われなければならない。⁽¹⁴⁾

IV

ヘリングらの概念的規準にしたがった方法に対して、これと逆の方法を用いる人たちがいる。その方法は文学的規準によっている。それはまず第一に Vaganay⁽¹⁵⁾ である。彼の方法は全く独特であって、単語、単語が配置されている仕方、単語相互が関係している方法を問題とする。ヴァガナイは全注意を語の具体性 (materialite) におく。また本文の組織においてある役割を演じているように見える幾つかの繰返しに注目する。たとえば序論の文の終りに「御使」という語が用いられ <御使たちよりもすぐれたものとなられた> (1:4), 続く句の初めに同じ語が再び現われ <いったい、神は御使たちのだれに対して...> (1:5), 新しい展開部が続けて天使のことを語る。ヴァガナイは 1:4—5 の「天使」という語を「鍵の語」(mot-crochet) と呼んでいる。《一方においてこれ (mot-crochet) は著者が如何なる主題を今や論じようとしているかを示すために、叙述の終りに入れられる。他方においてそれは主要概念を強調するためにこの新らしい主題の初めに再び用いられる。以下本書の終りまで同じである。それゆえ全体の区分の始まりが分らない程である。ただ種々な断片⁽¹⁶⁾の間に、ある部分から次の部分に移ることを示すためにある調整がある》。彼は同じような役割を果している他の語の繰返しに注目する。これによって彼はヘブル書全体を、それぞれ 1~3 つの分節 (section) を含む 5 つの部分 (partie) に区分する。かくして彼は唯一つ文学的方法、すなわち鍵の語の方法のみがヘブル書のすべての構造の要点を与えると断定するのである。⁽¹⁷⁾

このヴァガナイの説は多くの人々の注目を集めた。しかしこれを一番積極的⁽¹⁸⁾に評価したのはスピックであった。彼はその註解書の中で、ヴァガナイが提出した分析と構造の問題をとり上げ、これを強調した。彼は根本的に「鍵の語」の方法の意味を承認し、背景となるユダヤ的伝統 (五書, シラク, マッテヤ) に関連させた 5 つの主題への区分において、ある種の魅惑的なものを感じとるのだが、分析と構造の問題となると用心深く、ひかえ目なのである。そのことは何よりも変則 (Abweichung) の場合に明らかになる。彼によれば第三主題は再び 10:18 (10:39 ではなしに) で終り、信仰の忠実さを固守するという第四主題は 10:19 に始まり 12:29 で終る (ヴァガナイのように 12:13 で終らせずに)。このスピックの用心深さは批評を受けることになるのだが、ミヘルの言うように、セム的・旧約的構成要素をこの文学的方法の中で強く表面に出している点でこれは評価されるべきものである。⁽¹⁹⁾

さて、文学的方法を徹底的に押し進めた人として、同じくフランスの学者である Vanhoye をあげなければならない。彼のこの問題に関する研究は、*De structura litteraria Epistolae ad Hebraeos, Verbum Domini* 40, 1962, 73—80; *Traduction structurée de l'épître aux Hébreux*, 1963; *La structure littéraire de l'épître aux Hébreux, Studia Neotestamentica* I, 1963; *Les indices de la structure littéraire de l'épître aux Hébreux, TU* 87, 1964, 493—509 などがある。これらによって彼の説の要点を辿ってみよう。彼によれば「鍵の語」による結合はヘブル書全体の構造を説明するのには充分でない。というのは「鍵の語」は次の四つの場合にしか明らかに示されないからである。

1. 1:4—5 (天使)
2. 2:17—3:1 以下 (大祭司, 忠実)
3. 6:20—7:1 (メルキゼデク)
4. 10:39—11:1 (信仰)

他のすべての場合にはヘブル書は他の文学的手法を用いている。それはヴァンホイエが「主題の告知」(*annonces du sujet*)と呼んでいるものであるが、10:39 と 11:1 のような場合には「鍵の語」が同時に「主題の告知」の役割も果している。これは実はヴァガナイがすでに発見していたものなのだが、ただ彼はこれをも「鍵の語」と呼ぶことによって呼称の誤りを犯したのだとヴァンホイエは言うのである。⁽²⁰⁾ しかもこの二つはその機能を異にする。≪鍵の語の方式 (*procédé*) は、連続する二つのパラグラフを同じ語の反覆によって結びつけることにある。すなわちそれは推移という機械的な方式である。主題の告知の方式は、後に続く叙述の主題を予め指示することにある。すなわちそれは構成の知的方式である⁽²¹⁾≫。かくしてこの二つの方式はそれぞれ、ヘブル書の構造の大体の輪郭を定め、区分の表題を与え、多くの大区分の中での分類を指示し (主題の告知)、また一つの叙述への道を示す (鍵の語)。この二つの文学的指標の他に、ヴァンホイエはさらに次の四つを加える。それらは、

包括 (*inclusions*)

語彙の変化 (*variations de vocabulaire*)

類型の交替 (*alternance des genres*)

調和的配置 (*disposition symétriques*)

の四つである。

包括が一番多く用いられ、またもっとも重要な方式である。これは叙述の初

めと終りで同じ語または同じ形式を用いることによって、これに棒を与えることにあるといえる。

語彙の変化もまた注意しなければならない。幾つかの用語は一つの分節または部分にとって特有なものである。この指標は A. Descamps⁽²²⁾ によって光を与えられた。

類型の交替は以前から注目されて来た。著者はしばしば叙述の調子から勧告の調子に、またその逆に論を進める。このような指標によってヘブル書の構成を探るようになったのが R. Gyllenberg⁽²³⁾ である。だがヴァンホイエによればこの指標は有用ではあるが、それだけでは充分でない。⁽²⁴⁾

最後に調和的配置は、叙述の統一をよりよくとらえさせる。N. W. Lund⁽²⁵⁾ の著作はその一般的原則を提示しているのだが、ヘブル書の例を少しもあげていない。

以上の異なる指標の探究によって、ヴァガナイの区分の中に幾つかの細かい誤りがあることが明らかとなり、それらを訂正することができる。ヴァンホイエ⁽²⁶⁾ は言う。またそれはヘブル書のそれぞれの分節 (section) の中にさらに小さな小区分を認めさせる。

かくしてヴァンホイエが作り上げたヘブル書の区分は次のようになる。⁽²⁷⁾

区 分	主 題	型
a 1:1—4	序 論	
I— 1:5—2:18	天使の名とは全く異なった名	教 理
II—A. 3:1—4:14	忠実なイエス	勧 告
B. 4:15—5:10	憐み深い大祭司イエス	教 理
III—p. 5:11—6:20	序論的勧告	勧 告
—A. 7:1—28	メルキゼデクに等しい大祭司イエス	教 理
—B. 8:1—9:28	完成への到達	教 理
—C. 10:1—18	永遠の救いの源	教 理
—f. 10:19—39	終結的勧告	勧 告
IV—A. 11:1—40	古人の信仰	教 理
—B. 12:1—13	必要な忍耐	勧 告
V— 12:14—13:19	平安な義の実	勧 告
z 13:20—21	結 論	

このような概括的区分をさらに細かくしたものが、1:5—5:10までについて⁽²⁸⁾なされる。

第1部の区分

《天使の名とは全く異なった名》

- 1:5—14 第1章節：陳述
- 1:5—6 第1対比
 - a) キリスト 御子 1:5
 - b) 天使 平伏した 1:6
 - 1:7—12 第2対比
 - b) 天使 仕える者 1:7
 - a) キリスト 永遠の座 1:8
 - 塗油 1:9
 - 永遠の被造物 1:10—12
 - 1:13—14 第3対比
 - a) キリスト 神の御座 1:13
 - d) 天使 仕える者 1:14
- 2:1—4 第2章節：勸告
- 2:1 主題 注意の喚起 2:1
 - 2:2—4 (第4対比)
 - b) 天使 確実な御言 2:2
 - a) キリスト ずっと確実な救 2:3—4
- 2:5—16 第3章節：陳述
- 2:5—9 下降による勝利
 - a) 引用 2:5—8a
 - b) 釈義 2:8b—9
 - 2:10—15 連帯関係 主題 2:10
 - a) 彼の兄弟との連帯関係 2:11—13
 - b) 死による救 2:14—15
 - 結論—包括：天使ではなく人を 2:16
- 2:17—18 結論—推移：憐み深く忠実な大祭司

第2部の区分

《忠実で憐み深い大祭司》

A. 第1分節 (3:1—4:14) : 忠実

3:1—6 第1章節: 陳述

- 3:1—2 主題: イエスとモーセの忠実
- 3:3 卓越の報告の確認
- 3:4—6a 卓越の報告の説明
- 3:6b 勧告への推移

3:7—4:13 第2章節: 勧告

- 3:7—11 神の言の引用
- 3:12—19 第1小区分
 - キリストの仲間における不信仰に対する警告 3:12—14
 - 引用 3:15
 - モーセの仲間における不信仰 3:16—19
- 4:1—5 第2小区分
 - 安息に入れ 4:1—3a
 - 引用 4:3b
 - 神の安息 4:4—5
- 4:6—11 第3小区分
 - 新らしい今日 4:6—7a
 - 引用 4:7b
 - 真のヨシュア 4:8—11
- 4:12—13 神の言の讚美

4:14 結論—包括

B. 第2分節 (4:15—5:10) : 同情と祭司職

4:15—16 序論: 勧告

5:1—10 展開: 陳述

- 5:1—4 大祭司の定義
 - 人々のためにも入ること 5:1a
 - ささげものと苦難 5:1b—3
 - 神の選び 5:4
- 5:5—10 キリストへの適用
 - ささげものと苦難 5:7—8

(5:9—10) 第3部の第3分節の告知

以上の区分が、神学的論証は勧告の基礎となっている一種の下部構造であるという従来の説を無効にし得るであろうか、との疑問を提出しつつ、ミヘルはヴァガナイとヴァンホイエが頑固に10:19—39を中心部の勧告的結論として⁽²⁹⁾いることを認めなければならぬという。われわれは文学的規準によって試みられた、最も徹底したヘブル書の区分をここに見ることができるのであるが、果してこれがヘブル書の構造を最もよく表したものであるかどうかについては、疑問を感じるものである。それはその方法の不完全さによるというよりは、むしろ余りに科学的に厳密過ぎることによるというべきであろう。そこで、われわれはこの方法の長所を十分に評価した上で、なおもう一つの方法について考えたい。

V

ヘブル書が原始キリスト教会の説教であることを強調し、したがってその勧告の部分に重要性を認める立場の人たちが何人かある。ここではまず Schierse⁽³⁰⁾をあげたい。彼によれば、かつてロマ書に準じて行なわれていたヘブル書の区分(10:18までを教理的部分、10:19以下を勧告の部分とするわけ方)は今日ではほとんど行なわれない。本書には幾つかの勧告の断片が全体にわたって散在しており、規則的に教理的部分と交替している。また Cornely—Mark (Introductio 1940¹², 903) 以来、勧告こそが本書の主目標になっていることが認められている。シュルゼはヘブル書の鍵は勧告の部分にあるとし、教理の部分の目標を勧告から規定しようと試みる。彼による区分は次の通りである。⁽³¹⁾

I 1:1—4:13 教会の約束と言葉

4:12, 13に神の言の讚美がなされており、これと1:1, 2を比較することによって、キリストにおける神の語りかけというこの部分の主題が見出される。2:1—4および3:1—4:13の勧告の部分では神の言への聴従が命ぜられる。ここでは神の言への聴従がキリスト論的、教会論的、終末論的に捉えられており、1:1—14および2:5—18の教理的部分は、いずれもこの三つの観点から分析されて全体の脈絡に組入れられる。

II 4:14—10:31 教会と約束の業 (= 契約)

この部分は形式上は三つの勧告 (4:11—16; 5:11—6:12, 10:18—31) と二つの教理的部分 (5:1—10; 6:13—10:18) から成っている。この中で 5:11—6:12 のみは幾分特殊な位置を占める。この部分全体を理解する鍵は 4:14—16 および 10:19—31 にある。この両者は内容的にきわめて類似しており、他の教理的部分に統一を与え、またその目標となっている。本書の主要な区切りを 10:18 の後におくのは、ヘブル書釈義の際の宿命的な誤りであった。著者はやはり、次に来る勧告の言葉において初めてその思索の結果を述べようとしているのである。この部分は第1部よりさらに思想が発展している。すなわち、今や救の宣教を聞き、これに従うだけでなく告白を守り恵みの御座に近づくことが勧められる。これは礼拝的祝祭の意味を持つ。ここでもキリスト論、教会論、終末論のモチーフが働いている。

III 10:32—13:22 教会と約束の目的

この部分の内容の特色は 10:36 の勧告に示される。〈神の御旨を行なって約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは忍耐である〉。勧告をもって解釈の手がかりとするというシェルゼの方法は、特にこの部分において目立つ。第1部からの思想の発展はかくして、神の言を聞くこと→約束の現実の礼拝的祝祭→忍耐と神の御旨の成就による約束の目的の達成、という順序になる。この第3部では、終末論的モチーフが大きな役割を果している。11章もまたこの線にそって述べられている。救の完成への道は、「聞く」、「入る」、の他に見えざる未来の世界に向かって「立つ」という形において示される。ここでは実践的傾向が強いために、キリスト論的、教会論的モチーフは幾分弱く、たとえばキリストは信仰の最高の模範となっているが、教会論的叙述の重要なものは幾つかある。

Nauck⁽³²⁾ は、まずヴァガナイらの提唱した見出し語による方法 (Stichwortverfahren, ヴァガナイの用語では mot-crochet) の過大評価をさける。彼によれば〈連鎖は著者にとってむしろ修辞学的な補助手段ではあっても、彼の思想と論理の基礎ではない⁽³³⁾〉。彼は勧告が頂点であるというミヘルやシェルゼの意識と思想連鎖というスピックの認識とを結合し、ヘブル書の構造の形式として一つの区分の終りと主旨の初めとの結合を考えている。つまり初めと終りで首尾一貫するということである。その場合、三つの主章の最初のもの (1:1—4:13) は対応が勧告的ではなく讃歌的なもの、すなわち 1:2b—4 のキリスト讃歌に

4:12—13 のロゴス讃歌が対応する限りに⁽³⁴⁾おいて、根本的な例外である。かくして⁽³⁵⁾ナウックによる区分は次の如くなる。

I 1:1—4:13 御子においてわれらに与えられた神の言は讃歌(1:2b—4)と聴従への呼びかけ(2:1以下)に始まる。すなわち、神の言は信仰を他のすべてのものの前提とする。

II 4:14—10:31 信仰の聴従の結果は讚美(告白)である。神に近づきつつ告白を固く守ることが大切である。なぜならキリストがこの(神に至る)道を開かれたのであるから。

III 10:32—13:17⁽³⁶⁾ 告白の結果は服従である。それゆえ固く立って、信仰の源であり完成者であるイエスに従うべきである。

このようにして事実へブル書の構造は、目標を誤らぬ、もとにもどすことのできない思想として示されている。それは聴従 → 告白 → 信仰という道である。いいかえればそれはそれぞれの説教の方法的構造である。

VI

これまでわれわれはへブル書の構造に関して、パウロ書簡に準じて教理的部分(1:1—10:18)と実践的部分(10:19—13章)とに分ける方法に始まり、同じく教理(大祭司キリスト論)に重点をおいた三分法、概念的規準に基づく区分、文学的規準に基づく区分、そうして教理と勧告の交替に注目し、へブル書が説教であるとの観点から教理の部分の目標を勧告によって規定せんとする方法などを見て来た。

われわれはもちろん古い二分法はとらない。また以前のミヘルや中川氏のような、へブル書の中心を7:1—10:18の大祭司キリスト論におく三分法もとらない。⁽³⁷⁾ヴァンホイエによって修正されたヴェガナイの区分はこれを十分に評価するが、その方法にいささかのメカニズムの傾向を覚える。そこでは全体についてのきわめて綿密な分析が行なわれるが、全体的な統一の面で不完全であると言える。

われわれは方法論的にはシェルゼーナウックの線をとりたい。すなわち、教理と勧告とが互いに交錯しているところに注目し、教理の部分が勧告によってしっかりと支えられ、その内容が規定されているゆえに、区分の鍵は勧告にあることを認め、これによって区分を行なう。その際へブル書全体を通じて働いているテーマを見出すことに努めたい。かかる趣旨に基づいて本書を区分する

と次の如くなる。⁽³⁸⁾

	教理の部	勧告の部
第1主章	1:1—14 キリストにおける <u>神の言</u> の語りかけ	2:1—4 <u>神の言への聴従</u>
	2:5—18 (<u>神の言の内容</u> としての)来るべき世界は、イエスとの結びつきによって約束される。	3:1—4:13 <u>神の言への聴従</u>
第2主章		4:14—16 <u>告白を固く守り、恵みの御座に近づこう。</u>
	5:1—10 告白の内容である大祭司キリストの人格	5:11—6:12 特別な勧告
	6:13—10:18 われわれのさきがけとしての大祭司イエスのつとめと犠牲	10:19—31 <u>告白を固く守り、恵みの御座に近づこう。</u>
第3主章		10:32—39 <u>忍耐の必要性</u>
	11:1—40 信仰による <u>忍耐</u>	12:1—4 <u>耐え忍んで走り抜こう。</u>
	12:5—11 父なる神の訓練	12:12—17 まっすぐな道をつくれ。
	12:18—24 <u>忍耐</u> の報い	12:25—29 神に喜ばれるように仕えよう。
		13:7—17 <u>キリストのはずかしめを身に負うて營所の外に出よう。</u>

結 語

以上の区分により明らかなことは、勧告が各主章のテーマ形成にきわめて重要な役割を果していることであろう。このテーマを順に辿ると神の言への聴従→天の聖所への招き→忍耐という思想の発展が見られる。これを別な言い方をするならば、第1主章においてはキリスト論的モチーフが、第2主章においては教会論的モチーフが、第3主章においては終末論的モチーフが働いているといえるのである。さらに各主章を詳細に検討するならば、それぞれの内部においてもこの三つのモチーフが働いており、これが本書全体を貫いていることが分る。しかもそれはシェルゼも指摘している如く、1:1においてすでに暗示されているのである。

註

- (1) C. Spicq, *L'Épître aux Hébreux*, I. Introduction, Paris 1952
- (2) *ibid.* 27
- (3) C. Spicq, *op. cit.*, 27—38 (Le plan de L'Épître)
H. W. Montefiore, *A Commentary on the Epistle to the Hebrews*, London 1964, 31
O. Michel, *Der Brief an die Hebräer*, Göttingen, 1966¹², 29—35
- (4) *cf.* C. Spicq, *op. cit.*, 28
- (5) *ibid.*, 28 (2)
- (6) *ibid.*
- (7) *ibid.*
- (8) ミヘルは Meyers Kommentar の中のヘブル書註解の第11版(1960年刊)と第12版(1966年刊)との間で、ヘブル書の区分についての意見の変更を行なっている。その間の事情は、彼の論文 *Zur Auslegung des Hebräerbriefes*, *Nov Test* 6, 1963, 189—191 の中に明らかにされている。彼は、Nauck や Schierse たちが勧告の部分からテーマを見出していることに注目し、これがヘブル書の区分に際してきわめて重要であると述べる。またさらに、ナウックの背後にはフランスの学者たちの主張があることを指摘し、もっとドイツの学者はフランスの文献に注目すべきであるとしている。また彼自身も Vaganay や Vanhoye にしたがって、これまで自分の行なって来た区分の中、第3部を11章から始め、10:19—39を第2部の結論の勧告としてみよう、といっている。註解の第12版ではこれが早速とり上げられている。それゆえに今や彼を中世紀的な意味での三分法の代表者と見なすことはできなくなってしまった。
- (9) 中川秀恭 *ヘブル書研究* 創文社 1957
- (10) Th. Haering, *Gedankengang und Grundgedanken des Hebräerbriefes*, *ZNW* 18, 1917—18, 145—164.
- (11) H. Windisch, *Der Hebräerbrief* (HNT 14) 1913, 1931².

- (12) Haering, op. cit., 148. cf. A. Vanhoye, Les indices de la structure littéraire de l'Épître aux Hébreux, TU 87, 1964, 493f.
- (13) F. C. Synge, Hebrews and the Scriptures, 1959
- (14) E. Grässer, Der Hebräerbrief 1938~1963, ThR 30, 1964, 161.
- (15) L. Vaganay, Le plan de l'Épître aux Hébreux, Mémorial Lagrange, Paris, 1940, 269—277.
- (16) ibid., 269f.
- (17) ヴァガナイは序論 (1:1—4) を除いてヘブル書を 5 つの部分に別ける。
1. 天使にまさるイエス (1:5—2:18)
 2. あわれみ深く忠実な大祭司イエス (3:1—5:10)
 3. 予備的警告 (5:11—6:20)
メルキゼデクに等しい大祭司イエス (7:1—28)
完全な大祭司 (8:1—9:28)
永遠の救いの源 (10:1—39)
 4. 信仰における忍耐 (11:1—12:13)
 5. 平和によるきよめの大きいなるつとめ (12:14—13:21)
- 結論：最後の勧告 (13:22—25)
- (18) C. Spicq, op. cit., 31ff.
- (19) O. Michel, op. cit., 30.
- (20) A. Vanhoye, Les indices de la structure littéraire de l'Épître aux Hébreux, TU 87, 1964, 496.
- (21) Vanhoye, op. cit., 496; E. Grässer, Der Hebräerbrief 1938—1963, 164.
- (22) A. Descamps, La structure de l'Épître aux Hébreux, Revue Diocésaine de Tournai 9, 1954, 251—258 および 333—338.
- (23) R. Gyllenberg, Die Komposition des Hebräerbriefes, Svensk Exegetisk Årsbok 22—23, 1957—1958, 137—147.
- (24) Vanhoye, op. cit., 499.
- (25) N. W. Lund, Chiasmus in the New Testament. A Study in Formgeschichte, Chapel Hill 1942.
- (26) Vanhoye, op. cit., 500.
- (27) ibid., 509. Grässer, op. cit., 165.
- (28) ibid., 508f.
- (29) O. Michel, op. cit., 33. なおこのミヘルの意見は、早くとも1960以後に形成されたものであることは明らかである。註(8)参照。
- (30) F. J. Schierse, Verheissung und Heilsvollendung. Zur theologischen Grundfrage des Hebräerbriefes. Münchener Theologische Studien I. 9, 1955
- (31) ibid., 197—206
- (32) W. Nauck, Zum Aufbau des Hebräerbriefes, BZNW 26, 1960, 199—206.
- (33) ibid., 201, cf. Michel, op. cit., 31
- (34) Grässer, op. cit., 166.
- (35) Nauck, op. cit.
- (36) ミヘル (op. cit., 33 (1)) はナウックが10:31と32の間に区切りをおくことに疑問を抱いている。
- (37) ナウックがヴァガナイの影響を受けている程度に、われわれもまたこれに負うと

ころが多い。

(38) ここでは仮りに教理の部、勧告の部という区別をしたが、われわれの本来の趣旨から言えばこの区別は無用のものなのである。ただ如何に勧告がテーマの形成に大きな役割を果しているかを明らかにするためにこれを明示したに過ぎない。第3章はミヘルの忤議にもかかわらず、これを10:32からとする。忍耐のテーマはここからすでに明らかであるのだから。

(39) Schierse, *op. cit.*, 198.

Der Aufbau des Hebräerbriefes

Akinori Kawamura

Der Brief an die Hebräer gibt uns den Eindruck, dass er ein besonders sorgfältig gebauter Brief ist. Die Forschung über den Aufbau dieses Briefes ist immer wieder versucht worden. In den neueren Kommentaren des Hebräerbriefes wird dieses Problem als ein wichtiger Teil der Einleitung behandelt.

Früher teilte man diesen Brief analog zum Römerbrief in zwei oder drei Teile. Dabei ist die wichtigste Interpunktion zwischen 10 : 18 und 19 — vor 10 : 18 als dogmatischer und nach 10 : 19 als paränetischer Teil. Diese Einteilung ist doch nicht mehr gültig.

Das von Vanhoye verbesserte Stichwortverfahren des Vaganays ist zwar literarisch vollständig und sehr lehrreich, aber allzu mechanisch. Obwohl dort die sorgfältige Analyse versucht ist, ist es vom Gesichtspunkt der gesamten Einheit nicht genug.

Unsere Methode folgt Schierse und Nauck nach. Wir beachten das Phänomen, dass das dogmatische Stück mit dem paränetschen verwechselt und erkennen an, dass der Schlüssel der Einteilung die Paränese ist. Bei der Einteilung mit dieser Methode bemühen wir uns eifrig, um das Thema zu finden, das durch den ganzen Brief durchgeht. Nach unserer Einteilung ist es klar, dass die Paränese eine wichtige Rolle spielt, um das Thema des jeden Hauptteil zu bilden. Das Thema entfaltet vom Zuhören zum Wort Gottes → Einladung zum Allerheiligsten → Geduld. Anders ausgedrückt: Im 1. Hauptteil spielt das christologische Motiv, im 2. Hauptteil das ekklesiologische und im 3. Hauptteil das eschatologische. In jedem Hauptteil spielen diese drei Motive, die durch den ganzen Brief durchgeht. Das wird schon im 1 : 1 angedeutet.